

---

# 世界に嫌われた女の子

chemical

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

世界に嫌われた女の子

### 【Nコード】

N5255Z

### 【作者名】

chemical

### 【あらすじ】

ハルがふつとばされた世界で出会ったのは、神と皇帝。女嫌いの皇帝と人を信じきれない少女のはた迷惑な恋物語。（リハビリのために、サイトにあるお話を少しずつ改訂していくことにしました。タイトルは同じですが、少しずつ内容は変わっていくと思われます。全部改訂しなおしたら、サイトに戻します。土日以外1日1回更新したいです。）

## 1（前書き）

不意に流血や痛いお話がありますのでご注意ください。  
この改訂が終わったら、サイトを通常運転に戻したいです・・・

晴は不思議な子であった。

晴自身は当り前の事だと感じていたのだが。

周りの人には分からないものが、彼女には見え、聞こえ、触れられた。

けれど、晴はいつからか

自身に見えたこと、体験したことをあまり口に出してはいけなかったということも学んでいた。

それは、彼女の母親がいたからだ。

母親は精神的に弱っていた。

晴の言動一つ一つにひどく過敏に反応し、良いとは言えない反応を示す。

晴は子供の動物的な本能で感じ取っていた。

物心ついた時には彼女の母はすでにそういった精神状態であったし時折、気まぐれのように示される愛情も

言葉の暴力を投げかけるときでさえも晴にとっては母という存在以外の何者でもなかった。

母のその状態は彼女が生まれる少し前に他界した父親の事故のせいでもあったかもしれないが、

彼女もまた敏い人であったから晴の異常さに怯えていたのかもしれない。

母親は晴の不思議な言動を子供の言うことだから、と受け流すことをせず

罵りに変えて吐き出していった。

まだ、言葉の暴力だけだっただけ、まだだと思うかもしれない。

晴自身は、幼すぎてそのころの生活を思い出すことも難しいが

母と子、2人の生活の中で、大きな影響をもつ存在からの否定は

彼女を内向的にするには十分だった。

内向的になった彼女を、支えてくれたのは母ではなく、人でもなかった。

そうして、その交流を母に知られることでまた母の精神も削られていった。

悪循環というのだろうか。

繰り返される言葉の暴力と堂々巡りに晴は黙って耐えることしかできず、

彼女は母親の前であまり喋らず、行動しない子になっていった。

だが、晴には逃げ場所ができた。

それは、彼女にとってとても幸運なことであつたといえるだろう。

子供というものには考え方、感じ方の見本が必要であり、一番の身近な手本が保護者だ。

それをなくしては精神の成育はうまく成り立たない。

晴にもそれは例外ではなく、事実その状態のままであれば

彼女の今の状態はなかっただろうと容易に想像がつくというものだ。彼女が世間一般的に見ていい子に育つたのは彼女の母方の祖父母のおかげに他ならない。

彼らは、年に一度は顔を見せに来ていた孫と娘が訪ねてこないことに疑問を抱き

母親と晴を訪ねた時、彼らはその異常に敏く気が付いた。

それだけではなく、彼らは彼女の母親が精神的に弱っている状態にあるということや

母の晴への接し方を知ったときに素早い対応をしたのだ。

もしかしたら、祖父母も薄々自分たちの娘の精神状態を疑っていたのかもしれない。

彼らは世間や周りの目を気にすることなく

母親を病院に無理矢理入院させ、晴を自分たちが住んでいる田舎へと引き取ったのだった。

祖父母に連れられて田舎へと行った晴は

その小さな目に、収まりきらない世界を見た。

怯えた小動物のようなビクつきは消え、青白かった頬には赤みがさし子供らしい柔軟性と順応性で欠けていた様々なものを取り戻したよ

うに見えた。

彼女の顔には表情が戻り、毎日近くの野山を駆け回ることを楽しみにする普通の子供になっていった。

彼女自身の周りには相変わらず、不思議な出来事が多かったが田舎特有の空気と、風土に紛れ込む程度のことだった。

けれども、晴は不思議なことは祖父母の前でしか語らなくなっていた。

幼かったとはいえ、母親の怯えや嫌悪の表情からそういった事柄を忌むべきことと認識していたからだろう。

他の人間には友人であつたとしても曖昧に誤魔化していたが一緒に生活を営んでいる祖父母にはさすがに通用しなかった。

初めのころは、祖父母に対しても怯えながら話していたが

母親の代わりに彼女を愛しんでくれていた祖父母は、晴の話を聞いても母のような反応は一切見せず。

笑って頷いてくれたり、ときには真剣な顔で注意を促したりした。

祖父母は晴がほかの子と違うことに恐怖は覚えていないようだった。いや、本当は彼らも晴に恐怖を覚えていたかもしれない、

ただ、その感情を決して晴には悟らせないようにしていたのかもしれない。

祖父母は、普通の子と同じようにやってはいけないこと、危ないと思われるようなことは

晴に厳しく言い含めたし、他の子らと同じように叱りつけた。

晴が不思議なことを体験した時は

幼い子供は神様の子だからね。と、優しく頭をなでてくれていた。

それは一度壊されかけた晴の世界を壊さないものであり、とても居心地が良かった。

そんな日々が続いていたのに。  
晴の7歳の誕生日にひとつの悲劇が彼女を襲った。

その場所に決しているはずがない彼女の母親が、彼女の前に現われたのだ。

精神的に弱っている彼女の母親は祖父母の手配した病院に入院しているはずで、

その病院はここからとても離れているというのに、  
母親はそこにいた。

入院患者の着ているような服ではなく、以前見ていた普段の服装のまままで

庭先に立つ彼女は、晴を見つけてゆっくりと微笑んだ。

そのとき祖父母は、晴の誕生日の御馳走のために1時間かけて隣の市の大きいスーパーに行くと言っていた。

祖父母の帰りを楽しみに待ちつつ庭で遊んでいた晴の目の前に立った母親。

その世間的にとっても美しい部類に入るその顔は、別れた時と比べると変わっていなかった。

晴のものは違い黒曜石のような髪と瞳をもつ彼女が、  
静かにたたえた微笑みは、見る者に優しさを感じさせるには十分だった。

「晴」

呼びかけられたその声に、晴は思わず母親に飛びついていた。

足がもつれるような勢いであつたが、母はしっかりと晴を抱きしめてくれた。

いくら傷つけられたとしても、いくら罵倒されようとも

彼女は晴の母親であり晴の大好きな人なのだ。

物心ついてから晴が知る母は、時折気まぐれに愛情のようなものを示す人だったが

そんな偏った情を与えてくれる彼女でも、母親という晴の狭い世界



の中心だった。

そんな彼女が、笑顔で腕を広げ

晴を包み込むように抱きしめてくれたことは

その時の晴には誕生日よりもうれしいことであつた。

母親には1年ほどあつてはいなかったが、

こんな微笑みで晴を呼ぶ彼女はもう、弱っていた精神が回復し退院してきたのかと思わせるほどで。

「おかあさん！おかあさん！・・・」

泣きながらしがみついてくる我が子をやさしく抱きしめながら、縁側から彼女は娘を家の中へと誘導する。

その顔には変わらず、微笑みを浮かべたままで。

「晴、ずいぶん大きくなったのね・・・」

頭をなでながら優しく、泣きじゃくる娘に語りかける。

一瞬、声の中に暗いものが奔つたことに

泣いていた晴は気がつかなかった。

けれど、それきり何も言わない母親に

晴は顔をあげ、母親を見上げた。

涙でかすんでいたが彼女の母親はさつきと同じ微笑みのまま。

そこで、晴は妙な違和感に取りつかれた。

こんな顔を母親は一度でも見せたことがあつただろうか。

時折見せてくれた愛情の中、こんなに手放しの微笑みはあつただろうか。

母親はいつも、少し怯えが見える顔で

それでも精一杯微笑んで晴を見つめてはいなかったか。

張り付いたように動かない母親の顔を、晴は思わずじっと見つめてしまっていた。

変わらない。優しい笑顔。晴が見たことがないくらいの。

変わらない表情に、どこからだろうか

晴の中に恐怖がぼつりと広がった。

晴は染みのように広がる本能のままに、母親から後退る。

畳で、晴の膝が少し痛いくらいに擦れてしまったがそれを気にする余裕はなかった。

母親は変わらない微笑みで彼女を見る。

「どうしたの・・・？」

微笑みは変わらない。

変わらない。

変わらない。

「やだっ！」

晴は怖くなって逃げ出そうとした。何が、とかなんてとか、理由は分からなかったけれどとにかく逃げることしか考えられなかった。

恐怖に背を押されるように部屋を飛び出そうとして後ろを向いた彼女首に細い、ひものようなものがしゅるりと巻かれる。

それが何かを確認する間もないまま、ものすごい力で絞められた。

「な・・・」

疑問を声に出そうとしても首が絞められているために声にならない。

だが、苦しそうな晴をみながら母親は静かに言った。

彼女の首を絞める動作には何の躊躇もないまま力を込めて。

「大きくなるからよ。晴が、私のちいさな子のままでいないから。こつやって、もう一度晴は小さくなるの、小さくなって

あのころに戻ってもう一度3人でやり直しましょうね」

精神が病んでいるからか、晴にも理解できない。

言葉の意味を考える間もなく、晴の意識は闇に落ちた。

晴の中を駆け巡ったのは、母親に対しての疑問や怒りではなく  
生きることへの欲求

ただ、死にたくなかった。

次に目が覚めたとき、彼女は無機質な白が囲む部屋にいた。

そこには祖父母が泣きながら彼女が目覚めるのを待っていて  
晴の名前をずっと呼びながら、よかった、ごめんね、しなくてよ  
かった。

そう何度も何度もかけられる声と彼らの涙に  
彼女の記憶にあることが現実起こったことなのだと実感させられ、  
それが悲しくて晴は思い切り泣いた。

悲しいのは、母親にそこまで嫌われていた事実だった。

なんとなく、自分が生きているからには母親は死んだのだろう。

と妙な確信が彼女のなかにはあった。

受け入れたくない記憶を、無理やり認めさせるかのような祖父母の  
泣き声に

晴は、その記憶から逃避することもできず

ただ、本当にあったこととして刻みつけられたのだった。

大分大きくなってからだったが、祖父母に教えてもらったことによ

ると、

母親は欄間にロープをかけて首をつっていたらしい。

そばには彼女の字で“晴をあたしから守って”という走り書きのメモも見つかった。

晴は自分では首を絞められてずっと気絶していた

と思っていたのだが、祖父母の話によると醜く変わった母親のそばでぼんやりと母親を見上げていたらしい。

祖父母が声をかけると、けいれんを起こして倒れ、そのままあの病院に担ぎ込まれたということだった。

医師が晴を診察して初めて、首にひもが巻かれ尋常でない圧力で絞められた事実が明らかになったという。

いくつかの組織はひどく傷ついていたが運良く重要な器官や声帯に損傷は見られず

絞痕に比べると医師も首をかしげるほどの軽傷だったらしい。

その後も、なんだかんだと問題はあったものの、晴は順調に成長していった。

ただ、なぜか人よりもとても成長が遅かった。

小学校6年生でも3年生ほどに見えたり、中学生になっても小学生と間違えられる容姿のままだった。

だが、そのことで彼女がいじめられたりすることはなかった。

からかわれることはよくあったが、彼女は事実を否定はしなかったし逆に言い返すこともしていた。

ひとえに彼女が、小柄ながら運動神経が抜群によく

小学生のころから誰一人彼女に喧嘩で勝てる者がいなかったということも

いじめられなかった理由の一つだろう。

広くて狭い田舎では、晴の祖父母が有名なサーカス出身ということ

が知れ渡っていたため、

彼女の運動神経を誰も不思議には思わなかった。

上級生も、彼女には一目置いていたし、

何より頭の回転が速く運動が抜群という彼女自身が

人に嫌われるような性格ではなかったという所が大きいだろう。

もしかしたら、知らず知らずのうちに頻繁に彼女の周りで起こる出来事によって、

周りの人間たちの同情を得ていたのかもしれない。

少なくとも晴はそう思っていた。

それなりに、晴は幸せな生活を送っていたが、14歳の時に彼女の祖父が突然他界した。

高齢であったのもそうだが、不幸な事故だった。

おしどり夫婦と評判高かった祖母も、祖父の他界から体調を崩し、晴が15歳の時に亡くなった。最後まで晴を気にかけてくれていた。早過ぎる、二人の死はとても悲しかったが

周りの助けと、祖父母の遺してくれた

これから生活していくには困らないだけの遺産、

生命保険によるお金、更にはよく知る弁護士のおじさんが後見人になってくれるという、

祖父母の温かい庇護は祖父母がいなくなっても晴を守ってくれていた。

そうして16歳になった晴は祖父母の家で一人暮らしながら高校生を送っている。

「いつてきます」

写真の中の祖父母にいつものように挨拶をして、彼女は学校に行くために家を出る。

なぜだろうか、彼女の親しい人たちはたとえ生身の姿ではなくなっただとしても

彼女の前に姿を現すことがなかった。

常ならざるモノたちを見、交流することができず晴の不思議も依然として幼いころのまま残っているというのに。

もしかしたら、姿を現すことで晴があちら側に飛び込むとも考えているのかもしれない。

それもいいかもしれないと、本当に時々考えてしまう。

庭の隅でさわさわとうごめくモノたちに恐怖を感じることもなく、逆に親近感さえわいてしまうのだから。

そんなことを考えながら、晴は門の脇に寄せていた自転車に鞆を放りこみ

田舎の一本道を自転車で駅まで向かった。

その駅から4つはなれた駅の近くに晴の通う高校があるのだ。

途中、朝からだだっ広い畑で農作業中の近所のおばさんたちと会い、いつものように挨拶をする

一人のおばさんが手に持っていた籠の中から黒いこぶし大の物を投げてきた。

晴がそれを軽く片手で受け止めると、おばちゃんは笑った。

「晴ちゃん！いまから学校かい？おばちゃんの特製焼肉おにぎりだよ！もっていきな！」

「危ない人には気をつけるんだよ！」

「知らない人についていつちやいけないよ!!」

「ほら、ジューズも持って行きなさい」

晴に次々とおばちゃんたちから物が投げられる。さすがにするめいかは朝からちよつと重いけれど。

みんな、晴が幼いころからの近所さん達で

晴の祖父母が亡くなったときから、まるで親のように晴を怒り、心配してくれている人たちだった。

彼らは、晴に会うといつも食べ物を与える。

金銭的には困ってはいないのだが、そういった食べ物は晴にとってとても助かるものだった。

晴は、料理があまり得意ではないからだ。

何しろど田舎なのでコンビニも少ないし、

スーパーの惣菜も夕方の割引を狙っているご老人たちやおば様たちにかかれば

晴が学校から帰ってきたころには微妙なモノしか残っていない。

「ほら、あんまりばさつとしてると電車に遅れちゃうよ！」

くれぐれも、暗い路地には入らないようにね」

いつものようにお菓子やらジューズやらをもらって、

高校生な自分にはちよつと過保護すぎる言葉をもらってと、いつも通りの朝だった。

「ありがとう！いつてきます!!」

そう言つて、もらったもの達を鞆に急いで詰め込んだ。

腕の時計を見ると、少し急がなければならぬ時間になっている。

おばさんたちに笑顔で手を振ると、自転車に飛び乗り

そのまま黙々と自転車をこぐ。

朝の少し冷えた風が心地よく、通り抜けて行つた。

数分自転車をこぎ続けていると、田畑が少なくなり段々と車通りが多くなる。

駅前の繁華街が近づいてきたのだ。

繁華街といつても住民が買い物をする商店街と

全国チェーンのファストフード店が一軒あるだけのもの。

けれども国道はそれなりに交通量が多く、ちらほらと小学生が近所の小学校に登校している姿も見える。

国道沿いに駅へと向かっていた晴は、視界の端に黄色い帽子がぴよこんと動くのを見た。

無意識に眼で追ってしまった晴が次の瞬間に見たものは

目の前の国道に黄色い帽子を被った男の子が飛び出すところだった。  
「あぶない!!」

叫んだが、自転車に乗ったままの晴の声は少年まで届かなかった。  
物を落つことしたらしく、少年は下しか見ていない。

けれど、少年が飛び出した道にはトラックが迫っていた。

大きな音を鳴らすトラックに、少年は逃げるのではなくびくりと体を硬直させた。

とつさに晴は自転車から飛び降りて、走った。

「っ……!!」

間に合うかギリギリのところだ。

持前の運動神経で体勢を崩すことなく自転車から道路に着地し、男の子を抱き上げると同時に男の子を歩道側へと放りなげる。

いつも通っている道だから、勘でしかないが

確か少年を投げた方向にはゴミの山があつたはずだった。

なくても、トラックにぶつかるよりはましだろう。

だって、少年を抱えたまま反対車線に出ても別の車にひかれてしまう。

そこまでは頭と手が回ったのだが、

少年を投げた後自分がどうなるかなんて考えてなかった。

ブレーキ音、悲鳴、衝撃

奇妙な浮遊感。

晴が覚えているのはそこまでだった。



死にたくないな。

そう、ずっと昔と同じことを思った。

思えば結構悲惨な人生だったのかと思う。

自分としてはとても幸せだったのだけれど、客観的に見て自分は悲しい人生を

歩んできたのではないだろうか、不思議なものが見え、母親に殺されかけ、

祖父母は早く亡くなり、その他、周りの人たちから心配されるほど、いろんな事件に巻き込まれてきた。

そうして、自分は子供を助けてトラックにふつとばされる。

・・・考えても典型的とまではいかないが、悲惨な人生だ。

「あー、まあ本人が満足してるだけでいいかなあ」

お、声が出た。自分はつきり死んだと思っていたのに。

「あ、死後の世界だから自分のどうとでもなるのかな？」

首をかしげる。実際生きているのならトラックにあたったからには少なくとも骨折や、怪我をしているはずで、その痛みがあるはずだけれども今、自分の体には全く痛みも傷もない。

と、ここまで考えて気がついた。

「ここどこ・・・？」

ほのかに白く明るい夢の中のような場所。

ここが死んだ人が来る場所なんだろうか？

てつきり、すぐに幽霊にでもなるかと思っていたのだが、

意外に、未練とかがなかったのだろうか。

「違うわよ。 ハル」

聞こえてきた声が、空間を切り裂いたように晴の耳に届いた。

「ここで会うのは久しぶりね。 まあ、もう元の世界には戻れないけ

ど」

傷の具合はどう？

とにこやかにほほ笑みながら、声と同じくいきなりその人は現れた。真つ黒な瞳と豊かにうねる髪を背中に流し、

白い布で挑戦的な体の覆い方をしている。ないすばでーのお姉さんだ。

ちなみに背中には真つ白な翼があった。

天使のような恰好のその人を見あげて  
晴は、言葉を失った。

いきなりファンタジーな恰好をした天使っぽい人が現れたからではない、

その人が、日本でこんな恰好をしていたら捕まりそうだなと思ったからでもない

いきなり現れたその人の顔に、だ。

黒曜石のようにまっ黒な瞳と髪の毛

大きな目と少し厚めの唇。とても整ったその顔は

母親のものだった。

「あ・・・お・・・かあさ・・・？」

目の前の者は母親に瓜二つであった。

混乱する。

自分の頭がおかしくなったんじゃないだろうか。

ふいに、過去の網膜に焼きつけられた映像が、頭の中を掠める。

だってお母さんは・・・ゆれていなかっただろうか・・・？

忌まわしい記憶の中の映像に心臓と体の言うことが聞かなくなる。

耳元で、うるさいくらい心臓の音が聞こえた。

かは、と肺から小さく空気が漏れる。

息ができない。

息を吸おうとしているはずの肺が、筋肉が働きを止めたかのようなまるで昔の無声映画のように、目の前で切り替わる映像のことしか考えられない。

「ストップ。落ち着きなさい！ ハル」

突然の女の人の声に、どうしてか晴の思考がはつきりとクリアになった。

無声映画のような映像は瞬く間に視界から消え、緊張していた体が自由になる。

胸を押さえていた手も、制服も汗で湿っていた。

片手を床につけ、必死で酸素を肺に入れるため息を吸い込む。

息を整えながら、ここまで動揺してしまうものなのか、と頭の冷静な部分で考えた。

まだ、囚われている。

母親に。

息を整える晴の前に、母親と瓜二つの女性は膝をつく。

気配に、晴が顔をあげると

女性は晴の肩にそっと、まるで愛しむように手を触れた。

「正確に言えば、あたしはあなたの母親ではないわ。

母親のような存在ではあるし、そっくりなのも認めるけれど。

落ち着きなさい。あなたは死んでないわ」

もう一度、言い聞かすようにゆっくりと言われた言葉は案外すんと晴の心の中に落ちてきた。

「あなたは・・・だれですか？　ここは・・・？」

絞り出すように言った言葉は、震えているけれどきちんと声にすることができた。

何のひねりも芸もない言葉だが、一番知りたいのだからしょうがない。

晴の中に冷静さはいくらか戻ってきたようだった。

女の人は笑って晴と同じようにその場に座り込み晴の目をのぞきこんできた。

とても怖かったが

さっきの自分に負けなくなかったから、晴は無理やり目を合わせ続ける。

そこにあっただのは意志のはっきりとした黒い瞳。強い生命力にあふれた瞳だった。

そう、あの人はこんな目をしなかった。

あの人の目はいつも違つところを見ていて、覗くとどこか暗い処に引き込まれそうになる。

そんな瞳をしていた。

この人と、彼女は違うモノだと

感覚で理解すると、晴の中に落ち着きと冷静さが一気にすべて戻ってきた。

女の人の目がやさしくなる。

そこには彼女には無かった、晴への純粹な愛情があった。

祖父母の笑顔を思い出すような、そんな視線だった。

見ず知らずの彼女から、そんな感情を向けられることに少し混乱しつつ

晴は彼女が口を開くのを待った。

「ハル。ここはね、あなたがいた世界と違う神々が治める世界。あたしはその中の一人。リルヴァーナ。

あなたは元の世界では事故にあつて、いなくなったことになつてゐる」

言われていることは無茶苦茶なのに、どうしても真実だとわかつてしまう。

真実だと理解してしまうことがおかしいのかもしれないが、晴は、この人の言葉に嘘はないと信じてしまっている。

この人には、そうせざるを得ない圧力がある。

世界が違ふとか、普通に考えてもおかしいことだ。

いくら、普通の人には見えないモノたちを見てきたとはいえ晴は疑り深いほうだ。

神はまだいい。日本にはそれこそ多くの神々がいて私もその存在を幼いころから疑つてはいない。

神と呼んでもいいのかわからないものたちも多くいるが神と呼ばれる存在はどことなくキラキラとしているのだ。

この女の人、リルヴァーナもそう。

時折目を細めてしまうほど、眩しい。

昔からの不思議現象のせいでこういう事態に慣れてしまったのか。どちらにしても一応は納得するしかないだろう。

今の晴が疑いを持って、あまり意味がない。

万が一夢の中だとしても、だれにも迷惑をかけていないのでセーフだ。

「私は、元の世界に戻りたいです」

戻れないとさっき聞いたような気がするが、聞いてみなくちゃ分からないだろう。

ここが夢であろうとどこだろうと、私が生まれた所はあそこなのだ

から。

私の言葉に、リルヴァーナは少し厳しい顔をしていった。

「あちらの世界の神々はあなたを手放すことに決めたわ。もう、戻れないの」

ごめんね、と

いつの間にか握られていた手を強くつかまれて泣きそうな顔で言われては、

根っこが馬鹿なくらいお人好しだといわれる晴に勝ち目はなかった。リルヴァーナが言った、晴を手放すとはどういうことなのだろうか。

「つまり、あつちの神様・・・？ 仏様とかキリストとかに私が嫌われたということですか？」

推測を言葉に出してみても、首をひねる。

神様に嫌われるって・・・なんか悪いことをしただろうか？

そんなに悪いことをした覚えはないはずんだけど・・・と、難しい表情で考える晴にリルヴァーナは焦っていった。

「嫌われたんじゃないの！むしろ好かれたからこっちにいるのよ！あのね・・・あつちの世界とあなたの相性はものすごく悪かったの。神々は何とか助けようとあなたを一度こっちに飛ばして相性の修正を図ったんだけど・・・」

結果は・・・運の悪さからもわかるとおり、ね。

だから、お気に入りのあなたを死なせたくないから、

相性のいいこっちの世界に泣く泣く手放すことに決めたのよ」

必死な言葉から嘘はないと感じられて、それはそれで悲しくなった。

神様に言われるくらい  
やっぱり、私ものすごく運が悪かったんだ…。

そんな気はしていたが改めて言われるととても悲しくなってくる。  
確かに、神様に嫌われているような気はしなかった。

助けようとしてくれるまで好かれていたのも知らなかったのだが。  
けれども、神様に助けてもらっていたというのにあんな運の悪さだったのならば

確かに世界と相性が悪いというしかないだろう。  
生きているだけましというものだ。

トラックに吹っ飛ばされて、いきなり変なところにきて  
神様に会って、世界と相性が悪かった・・・ってどれだけ現実離れ  
しているんだろうか。

今の状況が夢でも一向に構わないし、むしろそのほうが嬉しいのだが  
こっそりとつねった頬は痛いし、脳味噌以外の感覚が現実だと示し  
ている。

戻れないと言っていた。

元の世界に戻れないとなると、もう、友人にも近所の人たちにも会  
えなくなるということだ。

脳が考えるのを拒否しているのか

ふわふわとした現実感のない、悲しさがどんどん膨らんできて、勝  
手に涙まで出てきた。

「う・・・」

目の前がゆがむ。



頬を、温かいものが流れていく。

泣き始めた晴をリルヴァーナは優しく抱きしめて頭をなでてくれた。リルヴァーナのその手がまるで、お母さんのようで遠い遠い、昔の記憶が少し開いたのかもしれない。

悲しみだけではなく、既視感に後押しされて涙はどんどん流れていた。

泣き続ける晴にリルヴァーナは何も言わずにずっと頭をなで続けてくれる。

どれくらい泣いていたのかわからない。これから自分がどうなってしまうのか、どうやって生きていけばいいのか

全くわからないまま、晴はリルヴァーナの腕の中で泣きつかれて眠ってしまった。

## 5 (前書き)

皇帝視点です。

政務も終わって、汗も流して寝るときになって、問題というものはやってくるらしい。

自身の寝室に入ってすぐに違和感に気がつき

帝国の若き皇帝サングルド・ジャヴ・フリードリヒは冷静に腰の剣に手をかけた。

そのまま、何やら膨らんでいる自分のベットの掛布をめくると、そこには少女が眠っていた。

………変な格好をした少女が、自分のベッドで寝ている。

警備の厳しい皇帝の私室と、ある理由から

可能性は低いが、暗殺者が

夜這いをしにきた貴族のバカ女かと思っただけにこの状態は予想がつかなかった。

以前友人と流した自分がホモであるという噂はどこかで曲解されて幼女趣味にでもなったのだろうか。

もちろん自分はホモでも幼女趣味でもないが、女性というものに興味ではなく嫌悪を覚える、

という一種のトラウマのようなものがあるために噂を流して女性を遠ざけたのだ。

友人の一人にそういった趣味を持つ者がいたためにたくらみは成功し、

近頃ほとんど女が近寄ってくるなどなくなっていたのに、どうしてこんな状態になっているのであろうか。

「おい」

とりあえず声をかけてみるが少女に起きる様子は全くない。  
よくよく見てみると頬に泣いていた跡がある。

何なのだろうか。

この恰好を見るからには、ほかの国の者と考えるのが妥当だろう。  
だが、記憶を探ってみてもこんな恰好をする国などない。

さらに、色素は薄いが黒茶の髪の毛とは珍しい。

黒に近い色の髪の毛はサングルドでは生まれにくい。

この国で信仰されている神の持つ色だからだ。

一瞬、似たような色が頭の中を過ったがすぐに眠たさに襲われる。  
頭を軽く振って、寝ている少女へと近づいた。

ここまで近づいても全く起きる気配がない。

ジャヴはどうしたものかと、ため息をついて寝台に腰を下ろした。  
そうして、無造作に少女の髪の毛に手を伸ばす

色が珍しかったからかもしれない。

髪の毛を触ってみるとシーツの上に広がっている通り癖がなかった。  
さらり、と手から滑り落ちる。

ふと、今更であつたがここでも感じる嫌悪感がまったくないこ  
とに気がつく。

女ならば少女でも老女でも関係なく感じていた嫌悪感が今はない。  
不思議な感覚に驚きながら、皇帝は少女の肩を揺らした。

「おい」

少し強くゆすると少女がうつすらと目を開けた。髪の毛と同じ黒茶  
の瞳が見える。

だが、焦点はあっていない、寝ぼけているのだらう

ゆっくりと皇帝を見上げると、笑顔を見せた。

「リルヴァーナ・・・」

そのままこてんとまた、ベッドの上に転がってしまふ。

女神の名前を呼んで寝こけた少女。殺気もないし、安全そうだが、どうしろというのだろうか。

少し考えて、ジャヴはこういう結論に達した。

まあ、寝る場所は十分にあるか

そう考え、皇帝は少女の隣に寝転んだ。

朝、目が覚めると誰かの腕の中にいた。

リルヴァーナだと思い込んでそのまま胸に顔を当てるようにしてすがりつくと、

おかしいことに気がつく

リルヴァーナの胸がない

昨日はあったはずなのに、だ。

おかしい。これはおかしい。

意を決して晴が顔をあげると、深い紫色の瞳とぶつかった。

あっちも驚いているのかちよつと眼が見開き気味だ。

光を反射する長い銀色の髪と紫色の瞳の、日本人ではない青年。顔はとても整っている。

なまじ整っているだけに、髪の色などとあいまって少し冷たい印象がある。

マッチョといえるほどがっしりはしていないけど

腕の筋肉がしっかりしているから何か武術でもしているのだろう。

と、青年の腕をぺたぺたと触りそこまで考えてから自分がちよつと混乱していることに気がついた。

知らない人の腕を触って筋肉の確認をする乙女はあまりいないだろう。

というか、知らない人に腕を触られて大人しくしているこの人も何か反応をしてほしい。

青年はそんな晴をただ見ていた。

あまり表情は変わらなかったが、なんとなく怒っている雰囲気では

ない。

昨日のことでちょっと耐性がついたかなと思ったのだけれど、  
所詮人間は1回程度じゃ耐性は身につかないらしい。  
自分の学習能力にも疑問を抱きかけて、気がついた。  
そもそもリルヴァーナの腕の中で眠っていたはずが、起きたらやたらきれいな青年の腕の中。  
混乱しないほうがおかしいかもしれない。

「お、おはようございます?」

「おはよう」

外国人みたいなのに言葉が通じる。

それに、きちんと挨拶は返してくれた。

少なくとも直感から言って悪い人ではなさそうだ。

抱きしめられているのだが、他に何かされた様子もないし

彼が落ち着いている様子から考えて、これが彼のベッドなのだと予想がつく。

やっぱり謝るべきだろうか。

晴が悪いわけではないのだけれども。

考え始めた晴の横で

青年はゆっくりと晴を抱きしめていた腕を外してベットから上半身を起こし

伸びをした。しなやかな動きは、大きな猫みたいだ、と思う。

やっぱり、彼の様子からして危険はなさそうなので、晴もあくびをして伸びをした。

ここは、どこなのだろう?

あのあと晴はリルヴァーナの腕の中で泣き疲れて寝てしまったのだと思う。

と、いうことはリルヴァーナが連れてきたに間違いないが、何の説明もなしとはひどくないだろうか。

彼も吃驚していたようだが、まずは状況を知らなければ話にならない。

とりあえず、初めて会った人への基本を実行してみた。

「あの、はじめまして、私は晴・三上と言います」

「ハル・ミカミ？」

「はい、晴がファーストネームで、三上がファミリーネームです」  
外国っぽいからこういう名前を紹介したがどうやらあっていたらしい。ちよっとほっとする。

「私はサングルド・ジャヴ・フリードリヒだ。どう呼んでも構わない」

そう言って頭をなでられた。

言葉は冷たいが、いい人だと思う。ただし、子供扱いされてる感が否めないが。

「ところで・・・」

質問をしようとした青年の言葉にかぶさるようにして扉が乱暴に開かれた。

「ジャヴー！いい朝だね！さあ重要なお知らせがあるんだ！

この私の神官長としての今朝のお告げで女神が御子をこの国に預けるとでたんだ！

黒茶の髪と瞳の女性だってさ！！何年ぶりだと思う？」

金色の長い髪を一つにくくったその人は白を基調とした服を着ていた。

まるで、物語の中の王子様が着るような軍服とでもいえばわかりやすいだろうか。

その人自身も、まるで王子様みたいな顔立ちだ。



緑の瞳を輝かせて青年と晴のいるベットに目を向けた白い人は、そのまま固まった。

綺麗な顔なのにあごが外れそうなくらい口が開いている。

思わず定規を当てて測ってみたいくらいだ。

「ジャヴ・・・？その女の子は・・・？まさか・・・」

白い人が何か言っているが、小さな声すぎて晴には聞こえなかった。その代わりジャヴが晴に尋ねる。白い人の登場にも彼の表情はあまり変わらなかった。

「ハル、おまえは何歳だ？」

「16歳です」

一呼吸おいて、

傍目に分かるくらいぎよつとされた。確かに今でも中学生に間違われるが、その反応は傷つく。

「ジャヴは、何歳なんですか？」

お返しとばかりに、ちよつと気になっていた青年の年齢を尋ねると、19歳だと言われた。

こつちもちよつと吃驚した。

彼の表情や落ち着きようから、もうちよつといってるかと思っていたのだ。

それがわかったのだろう。ジャヴがちよつとムツとしたように言っただ。

「お前が小さすぎるだけだ」

事実だが、何か釈然としない。

「今に大きくなります」

こんなやり取りを見ていた、さっきの話からするとシンカンチョーとかいうらしい青年は、

間の抜けた顔から、一気に怖い顔になってベット近くまでずんずんと歩いてきた。

「ちょっとジャヴ。女には興味無いんじゃないの？」  
そうなのか、特殊な趣味をジャヴは持っていたんですね。

白い人の言葉に、晴は内心なるほど、と手を打つ。  
だから、晴が危険を感じなかったのだ。

白い青年の言葉にジャヴに視線を向けると、ジャヴはうなずいた。  
「興味がないというか、嫌悪感があるな」  
嫌悪感か、それは大変だな。と

そこまで考えてちょっとおかしいことに気がついた。  
晴は女の子だ。世間一般的に見てどう考えたって女の子だ。  
じゃあ、ジャヴというこの青年は晴にも嫌悪感を抱いていたのであるのか。

「すみません・・・」  
いやな思いをさせちゃいましたか？と言外にこめた言葉をおくると、  
ジャヴはちょっと困ったような顔をして首を振った

「いや、なぜかお前は大丈夫だ。安心していい」  
ジャヴのその言葉から  
どうやら、この幼い外見ならば大丈夫らしい。

そう勝手に結論づけた晴は、この青年に嫌われなくてちょっと安心して  
していた。

人から嫌われるのは、あまり好きではない。  
だが金髪の青年の解釈は違ったらしい。

「ジャヴ！なんてことだ！ジャヴが、ジャヴが女に騙される日が来る  
だなんて～！！」

頭を抱えて叫びまくっている。  
騙されてはいないと思うのだが、この状態であつたならば勘違いさ  
れてもおかしくない。

こんな風に叫ぶなんて、もしかしたらこのシンカンチョーという青

年はジャヴの恋人なのかもしれない。

悪いことをしたな、と思ったが、どう説明すればいいのか全く分からない。

何しろこの世界に来てまだたった1日なのだ。

恋人（仮定）のはずのジャヴも白い人の誤解を解くでもなく

ベッドのすぐ脇で叫び続ける彼を見ているだけだ。

しばらくたって、叫び疲れたのか

青年が静かになってきたところを見計らって、ジャヴが青年に話しかけた。

「おい、カイザーク。お前が何を思っただうでもいいが、女神の御子とはこれのことじゃないのか？」

さつき青年が言ったことをきちんと聞いていたらしいジャヴは、ハルを指さす。

ハルは指差されたあげくにこれ、と言われたが気になったのはそこではなかった。

「めがみのみこ・・・なんですか？それ」

女神なら知っているがめがみのみことはどう漢字変換していいのか分からなかった。

そんなハルを見た青年は、鼻で笑う。

「ジャヴ、女性といっただろう。そんな10歳くらいの少女を捕まえて女性とは・・・

目がおかしくなってしまったのかい？」

「ちよつとまってください！少女はひどいです！私は！」

叫んだハルを手を上げて遮ると、青年は冷ややかな目を向けてきた。ジャヴに向けていた目と違って、本気で敵意がこもっている。

「そうだね、皇帝の寝所に忍び込むなんて少女ではなく、悪女の間違いだったね」

そう言うが早く、青年の手元が素早く動いてハルの喉元に剣があてられた。

「さあ、君はこの手のものだい？何をしにここに来た。

さつさと吐かないとかわいい首が体から離れるよ」

そこにさつきまでの叫びつつけていた変な青年はいなかった。

あまりにも素早く変わった雰囲気、凍りつくような視線と殺気が彼

を取り巻いている。

気を抜けば殺されるだろう。

隠されることがない殺気と、あてられた剣から伝わる力が示していた。

さっきまでの会話の中で殺されるような話題の要素はあっただろうか。

ハルの主観だけだが、なかったと思う。

じゃあ、寝室に入っただけで殺されるような人のところに来てしまったのだろうか。

たぶん、それが正解だろう。

混乱していた時は目に入らなかったが、剣を首にあてられた状態で動き出した脳は

視界に入るものたちが高級なものとは縁がない自分でもわかるほどきれいで凝ったものばかりだと訴えていた。

ジャヴは偉い人であったとしたら、そこに勝手に不法侵入したのは私だ。

殺されても仕方がないかもしれないが、あいにくと簡単に殺される気もない。

白い人の言う言葉に全く心当たりがないのだから。

答えようもないし、いきなり剣を突き付ける人に話したくもない。

そう、のど元に剣を突き付けられた一瞬で冷静に考えた自分に苦笑する。

あいにくと、こんなことは初めてではなかった。

平和な日本という国においてさえ、ハルの日常は妙に危険に満ちていたのだから。

周りの人間から同情を向けられ、あだ名がつくほどに。

様々な危険から身を守るために必死にいろんなことを学び、身につけて今日まで生きてきたのだ。

あまりに遭遇する事件や危険、昨日初めて知ったその理由は世界に嫌われていたから、  
なんていうふざけたものだったけれど

おかげで、16歳ながら世界の理不尽さはわかっているつもりだ。

死にたくないなら足掻くしかない。

隙を探しながら、無表情に青年を見上げると青年も殺気を向けてきたまま動かない。

冷静だった。隙がまったくない。

「動揺もしない。本当に可愛くないね。何も言うつもりがないのなら死」

「16歳だそうだ」

青年の言葉の途中でジャヴが何も感情のこもっていない声で言った。  
ジャヴの言葉と、内容に一瞬青年の動きと注意がそれる。

その瞬間を、まっていた。

ハルは自分の喉にあてられていた剣に首が切れるのも構わずに、  
わざと首を押し付けて隙間を作る。

ハルが予想した通り、青年はジャヴの言葉に少し迷いが出たのだらう。

剣を引いてハルの首を飛ばすことをとっさにしなかった。  
それがハルの狙いだった。

ハルの首は剣を押し付けたことによって切れたが、切れただけだ。  
首の傷には構わずにハルは小さくやわらかい体を利用して体をひねり  
あてられていた剣の軌道から抜けだした。

突然の反撃に応えようとした、青年の  
剣を持っていた手が返される瞬間をねらって青年の懷に飛び込む。  
剣は、一定以上離れた相手を攻撃するのに適している。

つまり近づきすぎた人間にとっさに攻撃しようとするならば手首を返すことになるのだ。

ハルは、剣を持っていた青年の手首を捕まえると合気道の応用でひねりあげた。

剣から手が離れそうになったところで手首を捕まえていた手を放し落しかけた剣を奪って、青年に向けた。

全てはたった数秒の出来事だった。

ここまでハルが素早く、的確に動けるなんて思ってもみなかったのだろう。

なにしろ、青年の中で彼女は10歳くらいの少女ということになっていたのだから。

ハルだって、いつも相手にしている包丁やナイフとは違う刃物相手で、

うまくいくかはわからなかった。

けれど、このとき運はハルに味方した。

火事場の、というやつだろうか。いつもよりも素早く動けたし、青年の手をひねるのも簡単だった気がする。

初めて扱う形の剣を支える持ち手が震えないように、両の手で剣を支えた。

逆転された青年が晴を睨む。

そうしてハルの顔の額のあたりに目を向けて、驚いたように緑の目を見開いた。

「おまえ・・・」

「10歳じゃありません。16歳です！失礼な人ですね！！」

青年が何か言いかけていたがとりあえず言いたかったことを言う。首の傷がちょっと痛いので乱暴な言い方になってしまったかもしれないが

いちばん言葉で訂正したかったのはそこだ。

喉を動かしたせいかさっきの傷からとろりと生暖かい血が流れるのがわかった。

気持ち悪い感触に思わず顔をしかめると、ふわりと傷に何かがあてられた。

見ると、ジャヴが寝間着の袖口を傷に押し当てていた。

首を絞めるでもなく、どうやら圧迫して止血しているらしかった。

「痛いかな？」

そついった彼はなぜかハルのもつ剣を取り上げたりせず、

なぜか、侵入者扱いをされたハルを心配してくれているようだった。

「少しだけ」

素直にそう言うともた血が流れたようで寝巻の袖の赤がじんわりと広がってゆく。

「喋るな。今医師を呼ぶ。カイザーク、呼んで来い」

ハルに剣を突き付けられている青年にそう命令するとジャヴは

ハルの首に少し強く袖を押し当ててきた。

傷は意外に深かったらしい。

血は苦手なほうではないが、何しろ起き抜けだ。

ハルは寝起きが悪い。ときどき寝惚けることもあるくらいだ。

めまいがしてきたハルは剣を両手から外すとゆっくりとしゃがみこむ。



からん、と乾いた硬質な音をたてて剣が床に落ちる。  
床に膝をついてしまうとジャヴの手だろうか、  
寝台に寄りかかるように体の位置をずらしてくれた。  
どれほど経ったのか、

青年はいつの間にかいなくなっていて

ジャヴの命令どおり医師を呼んできてくれたらしい。

急激な失血によるめまいか、ただの寝起きのためか  
目を閉じて動けないでいたハルの首に

ジャヴではない第3者の手が添えられた。

「大丈夫ですよ。手をお放しになってください。でなければ治療が  
できません」

ハルは手を床につけているのでハルではなくジャヴへの言葉だろ  
う。

優しい老人の声が祖父とかぶって聞こえた。

気が抜けて、涙が出てしまいそうになるのを必死でこらえる。

もうどれくらい祖父の言葉を聞いていないのだろう。

いつもはこんなことで泣いたりなんかしないのに。

信じたくはないし、まだ完全には信じられないのだが

世界から嫌われ、こちらに放り出されたということが精神的にきて  
いるのだろうか。

そんなことを考えていたら、ジャヴの手が首から外れていった。

手をついていた体を支えてくれる。

少し引き寄せられた形になった。

力が出なかったのでジャヴに寄りかかってしまう。

「ありがとう」

と、唇だけで言うと言「いい」とだけ返ってきた。  
なぜか、その一言ですごく安心する。

と、ここでわずかに残っていたハルの理性が自身に疑問を投げかけた。

ほぼ初対面の、しかも美青年に傷口押さえてもらい、  
あまつさえ、支えてもらって安心するのは何故なのだろうか？

答えを考える。

やっぱり美青年だからか。

でも、ふつうは緊張するだろう。やっぱり美青年だし。

ああ、でも男性愛主義者だって言ってたしな。

でも、これが金髪の方の青年だったら緊張とかの前に意地でも自力で立っていたと思うのだ。

じゃあどうしてなのだろうか？

思考はとりとめがなく、痛みのせいか冷静に分析することができない。

考えれば考えるほど、よくわからない気持ちちがハルの胸の中から出てくる。

まるで、無理矢理おいしいものを食べらせられたような。

釈然としない気持ちだ。

回らない頭で懸命に考えていたからか、顔にまで血が昇ってきたように感じた。

そうこうしているうちに、そっとハルの傷口に手が添えられる。  
消毒するのだろうか？

出血が多かったようだもしかしたら縫うのかもしれないな、  
と思っていたら

突然、首のあたりが一瞬確かに温かくなる。

そのすぐ後にはさつきまでの感じていた傷の痛みと熱さが消えていた。

めまいは変わらなかったが、いきなり体が楽になったのだ。

眼を開き、ゆっくりと喉元に手をやると

血はついたが、肝心の傷はなかった。

「あれ・・・傷・・・ない・・・？」

茫然と呟くと、そばにいた老人が顔をくしゃくしゃにして笑った。

着ているものは金髪の青年と同じものようだったが、胸に金色の花の刺繍が入っている。

「お嬢ちゃん！ 治癒もしらんのかい？ いったいこの山奥で生活してたんだい？」

笑いながらハルの顔を覗き込んだ老人も、

先ほどの青年と同じようにハルの額を見ると一瞬驚いたようになる。

「・・・ああ、額に御印があるねえ。お嬢ちゃんが女神の御子様かい・・・」

わしは、神殿庁のグラン・ドルフという」

それからハルの額をまるで孫にするように、しわくちやの手でゆっくりとなでる。

懐かしくて、されるがままになっていたのだが

グランはおもむろに立ち上がり、近くにいた青年を思いっきり殴り倒した。

「御子さまを傷つけるやつがおるか！ この馬鹿者！！」

本当に思いつきだったのだろう。

と、というか老人の一撃にしてはいやに青年が吹っ飛んだ。

青年はものすごい音を立てながら壁に激突していったし、今も動かない。

おそろおそろ見ると、完全に白目をむいていた。

大丈夫だろうか？

グランはなおも、倒れた青年近づくと青年を蹴り始めた。

「御印も確認せんで！ この馬鹿が！ 一遍死んでその腐った脳みそ取り替えてこんかい！」

白目をむいた人間にやるようなことではなかった。

一方的な暴力が続く。

ジャヴも、見ているはずなのに一向に止めようとしなない。

さすがに、かわいそうになってきたハルはグランに向かって声をかけた。

「あ、あの・・・」

「なんだい？ お嬢ちゃん」

グランは素敵な笑顔と共に振り向いた。

素敵過ぎて、かける言葉が見つからないくらいだ。

けれども・・・さすがに、

「さすがに・・・しんじやいませんか？」

そう言ったハルの言葉でグランは青年を蹴るのを止めた。

ちよつと舌打ちしていたのが聞こえたが、気のせいということにしておこう。

青年をけり終えて、ゆつくりとハルたちのほうに戻ってきたグランは、

明らかにちよつとすつきりしたいい笑顔だった。

グランはジャヴの前に来ると深いお辞儀をした。

「陛下。では、わしはこれで・・・お嬢ちゃんはわしと来るかい？ 御子様は神殿庁の管轄だからね。これからいろんなことを知らないきやいかんだろうて」

祖父のような、グランのしわくちやの手が差し出されたが、ちよつと戸惑ってしまう。

神殿庁とはどこかはわからないが、みことやらが行く場所らしい。

きつとリルヴァーナが、ハルをみことやらにしたのだろう。

けれど、神殿庁にそこで転がっている青年みたいなのがたくさんいたらどうしようと思ったのだ。

グランみたいな人ばかりだといいいのだが・・・

困って、ハルは思わず、ジャヴを見上げてしまった。

不安がハルの顔に出ていたのだろう。

少し考えたような沈黙の後、ジャヴはハルの頭を撫でて言った。

「別にここにいていい。神殿庁から教育係を呼べばいいだろう」

無表情だったが、頭をなでる手は優しくかった。

「ありがとうございます」

グランの懐かしさとは違うこそばゆさを感じながら、ハルはジャヴにお礼を言った。

小さく見えることも、時には役立つらしい。と考えながら。

このときグランが、ジャヴの言葉とハルの頭を撫でる動作に目を見開いて絶句していたのを

ハルは見えていなかった。

この世界にふっ飛ばされて3日目。

ハルはこの城の何かがおかしいことに気がついた。

まあ、城といってもまだジャヴの居住区域から出たことはないのだが。

とりあえず、ここに来て一番驚いたことは、

銀髪的美青年、ジャヴがこのサングルド帝国と呼ばれる国の若き皇帝だったということだ。

19歳といていたはずなのに、その若さで皇帝だという。

確かに、外国では若い国王がいるところもあると、聞いたことはあった。

ただ、若い国王がいたとしても政治的な面ではあまり活躍しているかどうか怪しいところだ。

けれど、ジャヴはある程度重要な案件では最終決定権を持っているし一応総ての、帝国に関わる機関を動かすことができると言っていた。上の地位に立つにはそれなりの実績が必要であり

年齢も経験の一つとして重要視するが、皇帝だけは例外なのだという。

そんなこの世界の常識がハルにはいまいちピンとこない。

まあ、日本とほとんど環境が違うのですぐに納得できるものではないかもしれない。

一つだけ、納得できたことといえば

カイザークと呼ばれた失礼な人があれだけ警戒心もあからさまにしたことだ。

王様の部屋に不審者がいたら、あんな対応にならないほうがおかしいだろう。

だからと言って、彼に対する印象が良くなったのかと聞かれれば

ハルには否という方かなかったのだけれど。

もうひとつ、ハルが驚いたのが敷地の広さだった。

ハルがいるのはジャヴの居住区域で、つまり皇帝の家のようなものらしい。

館や塔というよりも、独立した一つの城に近いそこは

皇帝一人のためにしてはとても広いのだ。

万里の長城みたいな塀の中は東京ドーム何個分だろうと考えてしまったのは日本人の性だろうか。

だが、窓の外から眺める限りでも確実に5個以上は入ると思う。建物だけでなく、庭もだっ広いのだ。

でも、おかしいのはそこじゃない。

この区域、というか、城に人が少なすぎるのだ。

ジャヴという皇帝が住んでいるところなのだから、もっと警備の人とか、メイドさんとかいてもいいはずだ。

けれども実際に3日間で見たり会ったりした人は10人ほど。

同じ人には何回も会うのだが、他の人とは会わない。

最初はハルが警戒されているのかとも思ったりしたのだが、それにしてはこの城は静かすぎる。

人が動いている気配というか、ざわめきがちつとも聞こえてこないのだ。

つまり、ハルが警戒されていたり監視されているのではなくて、もともとこの区域には働いている人が少ないということなのだろう。そういえば、ジャヴも皇帝陛下という身分のはずなのに着替えなどは一人でしているらしい。

ハルはこの国の服をまだ一人では着られないので、ディアというぽっちゃりとしたおばさんに手伝ってもらっている。その人が、そう話してくれたのだ。

偉い人もきちんと身の回りのことを一人でするんだなと、感心した。ディアはこの城で見る3人の女の人のうちの1人。

この城は人が少ない上にさらに女の人はもっと少ない。

3人はみんなメイドのような服装をしているおばさんで、侍女というものらしい。

1人はマリーという洗濯物を集めて洗っている人。

2人目はエリザベスという人で、いつもものすごい速さで掃除をしている人。

そして、3人目のディアは食事のときとか、服の手配とかそのほかいろんな細々したことをやっているらしい。

みんないい人たちだ。

ディアが主にこの世界に不慣れなハルの身の回りのことを世話してくれているのだが

カイザークとかいう、あの白い人のように

いきなりジャヴの寝所に現れたハルのことを怪しむでもなく、ものすごく好意的だった。

ディアだけではない、城の中で出会う人のほとんどがそうだった。

ジャヴやグランからなにか伝えてあったのだらう。

彼らは好意的ではあったのだが、

微妙に何か期待のこもった目で見られているような気もした。

グランもそういう目を時々する。

2日目から毎日、午前中に、ハルはこの世界のことなどを教えに来てくれるグランと勉強会をしているのだが、

ハルを気遣ってくれているのか

グランは空いた時間にはお菓子やお茶を持ってきてくれたり、声をかけにきてくれた。

彼の教え方はとても解りやすいし、この世界のことを知るのはいかに面白。

ハルの知る常識からはかけ離れているものもあったが

政治や、お金などの考え方はよく似ていた。



今日も、さきほどまでグランと勉強会をしていたのだが、ディアが来て「だいぶ時間を過ぎてますよ！」と、授業を中断させたのだった。

根を詰め過ぎるのも良くない、とディアは

ハルとグランがすっかり忘れていた食事を持ってきてくれたのだ。

それなりに記憶力が良く、勉強熱心なハルにグランもついつい熱が入ってしまうらしく、

気がつけばいつも午後をだいぶ過ぎていた。

グランはハルに、この世界の仕組みや成り立ちを丁寧に教えてくれた。

それはもちろんハルの常識とはかけ離れているからこそ、

現実として理解するのは簡単ではないが、神話を聞いているようで面白い。

実際に神という存在を知ってしまっているからこそ、切り替えも早かったのかもしれない。

この世界の輪郭が見え始めてきていた。

この世界は6人の神様によって作られたフォールという世界で、6人の神様にちなんだ6帝国があるという。

帝国のほかにも国はあるが、帝国と呼ばれるのは6つだけらしい。この国は光の神様リルヴァーナにちなんだ国でサングルド帝国という。

リルヴァーナの眷族である光竜を祖先に持つ皇帝が代々治める国で、他の帝国はそれぞれ闇の神様ガウルの闇竜の末裔ヒューバルド帝国、水の神様リインファの水竜の末裔ラヴェル帝国、風の神様テューダの風竜の末裔シルフィ帝国、土の神様キリエの土竜の末裔ムルグ帝国、火の神様カカルヴの火竜の末裔ルスティーダ帝国がある。

6つの帝国はそれぞれ、独立しながらも協力して大きな世界を治めているそうだ。

神々と竜によって帝国ができたというグランの話は、まるでおとぎ話のようだった。

帝国以外の他の国は帝国に協立や属国を誓った国だったり、完全に独立体制を貫いている国なんかもあるらしい。

そういった国は小さいが多く、帝国には手を出さないが国同士の争いは頻繁に起こっていると言っていた。

そういった事への介入や、戦争の停止、他の帝国との連携、自国の政治などを、皇帝や帝国が行っているという。

サングルド帝国での主な政治の仕組みは頂点に皇帝、その次に政庁、財庁、魔術庁、神殿庁、騎士庁があり、またその下にいろんな機関があるというものであった。

政庁には5人、他の各庁には3人の庁官長がいて、仕事と権力を分担して政治を行っている。

政治に関しての重要な案件は各庁の庁官長と皇帝とで会議を行って

決議するのだそうだ。

最終的な決定権は皇帝にあるが、決議も決して飾りではなく重きをおいているという。

また、法律もきちんと定められていてサングルド帝国法という分厚い本が5冊ほどあった。

これはグランが持つてきてハルに1冊見せてくれたのだが、何とか書いてある事の意味はわかるものの、

ハルには難しかった。

ハルは女神のおかげなのかは分らないが、便利なことに

この国の言葉だけではなく書いてある文章の意味もだいたい理解できることが分かった。

だが、文字は書けない。

そのため、グランとの勉強会のほかに小さい子用の教本で文字を覚えていく。

ハルがディアの用意してくれた遅めの昼食を食べながら

今日習ったことを整理していると、

部屋のドアから軽めのノックの音が聞こえてきた。

## 11（前書き）

皇帝視点です。

若き皇帝、サングルド・ジャヴ・フリードリヒはいつもの執務室で3日前のことを思い出していた。

3日前に現れた少女。ハルのことである。

ジャヴは5年前の前皇帝の逝去の際にあつたある出来事で、女性というものに嫌悪しか感じなくなっていた。

軽く殺意まで覚えるときもあり、相当なものである。

だからと言って男に恋愛感情を抱いたことはもちろんないのだが、女性に触れられるだけで殺意がわくという今までの状態から

自分は一生独身で過ごすことになるかもしれないと先日までは考えていた。

帝位是最悪、すでに貴族に降嫁した姉の子供でも養子にすればいいかと思つていたのだ。

血筋的には少し問題があるが、リルヴァーナの庇護が厚いこの帝国ならば

何とかやっていけるだろう。

そう、考えていた。

あの少女が現れるまでは。

あの少女、ハルは出会いからして不思議だった。

寝室にいきなり現れたのに、自身は彼女を切り殺すことなく放置してしまつた。

ジャヴの居住区域は極端に人の数を減らしてある。

あそこにいるのはジャヴに幼いころから仕えている

比較的嫌悪を感じないメイドと使用人や護衛のみ。

彼らが優秀なため、侵入できるものはよほどの実力をもつた暗殺者くらいであろう。

一度、勘違いをした女官が来たこともあつた。

なかなか優秀な者だったのだが、仕事を評価したことが勘違いを助長したらしい。

メイドたちも、仕事のことでと思い彼女を通したらしいがジャヴが彼女に女性としての魅力を感じたことはなかった。

執務室に来ていた馬鹿女たちのことを知らなかったわけではないというのに

私室まで来て、無事に帰れると過信していた彼女に待っていたのはジャヴの容赦のない攻撃だった。

皇帝の私室に許可なしに、理由もなく侵入したとして不敬に問われたと聞く。

一応命は取り留めたと報告があつた気がするが、彼女のそれからに興味はなかったので

その後どうなったのかは知らない。

最初、ハルに気がついた時にも、実際殺そうと思っていたのだ。

寝ぼけていた時の自分の状態をはつきりとは思いだせないが

ただ、難攻不落だったこの場所に侵入してきたやつ顔を見てやろうと思つたのかもしれない。

それが

あの時掛布をめくつた理由だったと思う。

だが、掛布をはいだところに居たのが少女だったのは驚いた。

しかも、変な格好でのんきに寝ている。

一瞬、馬鹿な貴族の差し金かと思つたが、

そこまで、ジャヴを理解していない貴族などもうほとんどいないだろう。

女嫌いのジャヴの居住区に死を覚悟させてまで娘を送り込むだろうか。

いくらなんでもそんなことはしないだろう。

新手の暗殺者かとも思つたが、暗殺者が標的の部屋で寝こけるはずもない。

何より、殺気もないし、寝たふりをしているのも感じられなかった。うつすらと覚えていることは、声をかけて髪の毛を触ったということだ。

ジャヴは極限に眠い時寝ぼけた様な状態になってしまっただが、女性に声をかけ、ましてや触るなんてことをするほどではない。ただ、あの少女に興味が湧いたのだと思う。

触ってからしばらくして嫌悪感がないことに驚いた。

それでなくとも、触ってから気がつくなんて頭がどうかしていたんじゃないかと思う。

あの後、普通にベットで一緒に寝たのはたぶん衝撃が大きすぎて理性的な考えが停止していたのだろう。

いや、今でも停止しているのかもしれない。

なにしろあの日から、ハルという少女については嫌悪なんてまったく感じていないのだから。

むしろ、何か小動物のような感じが可愛らしいとも思う自身がいる。起きて、自分がハルを抱き込んでいたことにも驚いたが、おかしいとは思わなかった。

黒茶の瞳が女性に対する嫌悪感なんてすつとばしてしまっただかのようにも思える。

あれで16歳とは驚いたが、少女じゃないとわかって何も変わらなかった。

カイザークが部屋に来た時の言葉で妙に納得したくらいだ。

これだけ嫌悪を感じないのは、普通の少女ではなく女神が選んだ御子だったからか、と。

ジャヴの嫌悪感もさすがに神に対してはあまり向けられることがない。

カイザークが少女に向かって剣を構えたときにはわずかに憤りを覚えたような気がする。

ハルが16歳だという言葉のカイザークに言った時も女性に援護するような言葉をかけた事実が

そんな自分が信じられなくて、思わず固まってしまっているうちに少女の流血だ。

ハルのカイザークに対しての行動と度胸はものすごかったと思う。常人ではできないような無駄な動きがない逆転。

しかし、それを見ても彼女が暗殺者だなんて思わなかった。

いや、すでにそう思えなかったのかもしれない。

ハルの首から血が流れているのが目に入ったときには、

自分の体の血が逆流したような感じがした。

首に袖を当てて圧迫しても、血が逆流したような感じは止まず。

気がつけば、思わずカイザークに命令していたのだ。

カイザークも何か思うところがあつたのか、いつもならば

もう少し疑り深くなるところを急いで部屋を出て行った気がする。

今思えば

神官たちや魔術師には、

御子に付けられた印を見分けられる技があると聞いたことがある。

カイザークも何か感じていたのかもしれない。

あの時、カイザークが医師でもある神殿庁官長グランを呼んで、

戻ってくるまでの間も妙な感覚は収まることがなかった。

そのため、目を閉じたままのハルに何も声をかけられないまま

グランが来てもジャヴはハルの首から手を離せなかったのだ。

グランの言葉にやっと放して、ハルの体を支えたのだが

ハルの目は開かず、顔色も蒼くなっていた。

思わず声をかけたら、ありがとうと唇の動きだけで返ってきて

どうやら意識もはつきりしているらしいとわかって妙に安心した。

ハルにグランが治癒をかけるとハルの傷は癒え、

ジャヴはその時にはじめて自分がハルを心配していたということに

気がついたのだった。

グランは、ハルを神殿庁に連れて行くと提案してくれたが

多分、女嫌いのジャヴを気遣ってくれたのだろっ。

だが、ハルがジャヴを不安そうに見つめている姿を見たら思わず



ここに居ればいいと言ってしまった。

そう言った後の、安心したようなハルの笑顔が可愛らしかったので思わず頭をなでてしまったのだが、

その時のグランの顔は見ものだった。

あの、グランが目を見開いて絶句した様子など初めて見たような気がする。

その後のハルの世話を頼んだ使用人たちの顔も面白いことになっていた。

何しろ、女嫌いの皇帝が少女と一緒に住むといったのだから当然だろう。

少女といってももう16歳だと言っていたが、完全に周りは子供扱いだったように思う。

メイドたちは、女嫌いのジャヴが連れてきたのだから

もう、嫁候補だお祝いだと騒いでいた。まあ、あそこにはメイドも3人しかいないのだが。

この様子で行くとハルを皇妃にするために何も言わずともいろいろ世話してくれそうだった。

幼女趣味だと噂が立ちそうだが、仕方がない。

独身でいようかと思っていたところに、

嫌悪感がまったくわかない少女が出てきたのだから

これぞまさに女神の思し召しというほかないだろう。

ジャヴの顔に自然と笑みが浮かぶ。

出会って3日目にして、ジャヴにはハルを逃がす気は全くなかった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5255z/>

---

世界に嫌われた女の子

2011年12月20日21時47分発行